

ハラハラドキドキ、米づくり談議も弾む

現代農業 2023年
11月増刊

2023年11月1日発行 昭和27年11月17日
第3種郵便物認可 ISSN0289-3517

定価1100円

Autumn 2023

No. 55

季刊地域

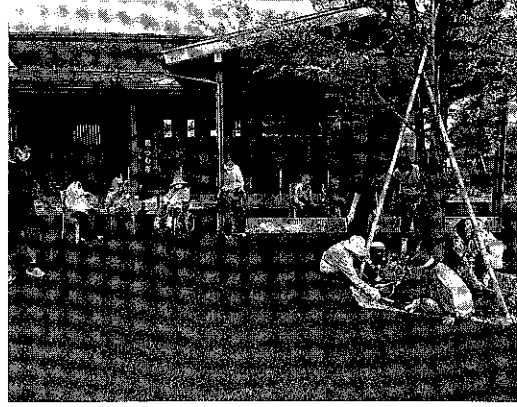
ニツチな山の恵みで
小さく稼ぐ



有機で 元気になる!

有機農業始めました 現場報告
「オーガニックビレッジ」に聞いた
生産者の増やし方、販路開拓、地域資源活用
有機学校給食の進め方Q&Aほか

ソーラークッカーで太陽熱利用
地域防災って心底大事です
半農半介護で助け合いの里づくり
食料・農業・農村基本法見直しに注文



高齢者と認知症対応の介護を一体的に行なう「まるごとケアの家 里・つむぎ」

護しながらの通勤は困難だったこともあり、母を看取るための施設を自ら開設しようとして決心しました。
有機食材を高齢者に食べさせたい
古い実家を改修し、宿泊とデイサービス併用する宅老所を開設したのが2011年です。
父が残した田畑があったので、当初から施設で提供する食事の米や野菜は自分で育てたものを提供したいと思っていました。しかし、農家に生まれながらも、農業経験はほとんどなく、ただ周囲に言

われるまま農業と化学肥料をふんだんに使用した米づくりを行なっていました。宅老所ではお看取りも行なっており、開設から4年後に母を見送りました。この母の看取り以前から、有機農業に取り組んでみたいと思うようになっていました。というのも、認知症状が進行すると施設利用者の意識はどんどん幼少期の記憶に近づいていきます。高齢者は農業とともに生きてきた方がほとんど。お看取りに向かう過程で、できれば無農薬・無化学肥料で育てた地域の食材を使った料理を提供し、お見送りできないかと思っただけです。
同時に農業についてもさまざまな書物を読み漁りました。食物連鎖や自然の循環について学び、万物の命はつながっていること、また身体の中とくに小腸は土と植物の関係性を見事に体現していることを知りました。知識が深まるにつれ、農業と介護のどちらにも通ずる命の循環性に気づき、両者が私の中で一つにつながったのです。
有機ニンニクづくりに障害者が活躍
「半農半介護」はそこから本格的にスタ

ートしました。本部事務所の周囲に老人ホームやグループホームなどを建てると同時に、就労継続支援B型事業所と農業の作業場も設けました。現在は「NPO法人里・つむぎ八幡平」と「一般社団法人すばる」の二つの法人を設立し、介護と農業を組み合わせた半農半介護の活動を進めています。
里・つむぎ八幡平は介護事業がメインで、宅老所（認知症対応型デイサービス・住宅型有料老人ホーム）、共生型グループホーム、共生型小規模多機能ホーム、障害者グループホームなどに加えて、古民家を利用した「古民家食堂なつかしの家」の運営も行なっています。すばるは農業を主な事業にした団体です。農業部門のすばるファームと就労継続支援B型事業所を運営しています。
すばるファームは水稲2・2ha、畑1・5ha。一袋30kg入りの米約400袋、ニンニク約3500kg、韓国トウガラシ400kg、その他ネギやジャガイモなどを栽培しています。有機JAS認証を取得した圃場は80aで、今年さらに1・4haまで拡大する予定です。
就労継続支援B型事業所は定員20人で、

半農半介護と地域まるごとケアで助け合いの里づくり



介護施設にある農園で野菜づくりを楽しむ利用者



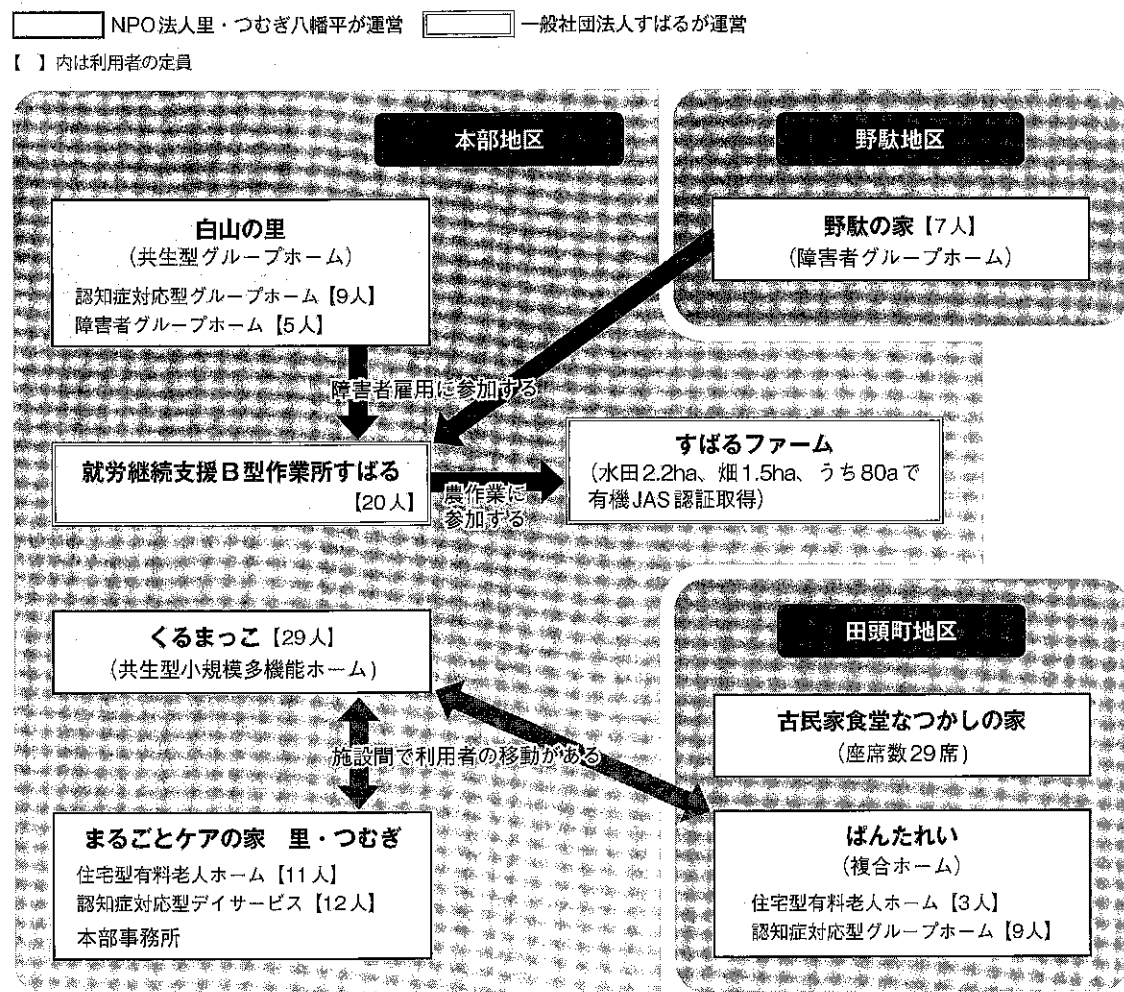
農にも介護にも通ずる命の循環

高橋和人（岩手県八幡平市、NPO法人里・つむぎ八幡平）

母の認知症を機に介護施設を開設
私が住む八幡平市は、岩手県の県庁所在地、盛岡市から車で1時間弱の所に位置します。林業と農業、観光業が盛んな地域で、土地面積は東京23区の1・3倍の広さがありながら、人口はわずか2万4000人。私は、この地で水稲や酪農を営む農家の4代目として生まれました。
若い頃は農業という仕事に未来を描くことができず、大学入学を機に都会に出て、さまざまな仕事を体験しました。紆余曲折を経て、父が亡くなったことをきっかけに地元へ戻ったのは40代前半。帰郷後もいくつかの仕事を変えながら暮らす中、偶然出会った高校時代の先輩に声をかけてもらい、特別養護老人ホームの立ち上げに関わることになりました。
福祉の仕事はまったく未経験でしたが、準備期間の半年余りと開設後の5年間、濃密に実務を経験できたことは、現在の私の活動につながる大きな下地となっています。
ホームでは事務長として、ここで骨を埋める覚悟で働いていましたが、勤め始めて4年目に母の認知症が発覚。母を介

半農半介護に取り組む法人と各施設

高齢者、障害者の介護を包括的に行なう「まるごとケア」を進めている。詳しくは次号にて。



現在15人の利用者がいます。このうち5〜6人がすばるファームでの栽培に携わっています。利用者一人一人の体調とその日の天候に合わせて、作業内容と作業時間は日々変わります。

有機栽培を進めようという彼らの存在は不可欠です。とくに、ニンニクは地元の固有種・八幡平バイオレットを有機栽培しており、除草作業やトウ摘み、株分けなど春から収穫期の7月初旬まで多岐にわたる重要な作業がありますが、そうした作業で彼らがいへん活躍し、よいニンニクがとれています。

今年はさらに黒ニンニクの加工でも有機JAS認証を取得しました。その加工作業でも彼らに活躍してもらう予定です。すばるファームでとれた米や野菜、ニンニクは、古民家食堂なつかしの家でも使っています。今年5月からは、毎月第1土曜日に「すばるマルシェ」を開催して販売も始めました。当日は野菜販売と喫茶コーナーに加え、別ブースで臨時の医療・介護相談なども行なっています。

施設の職員も半農半介護

各介護事業所も規模は小さいですが農

園を持ち、職員が主体となって野菜を栽培しています。事業所の利用者にも植え付けや草取り、収穫作業をしてもらいます。職員と利用者が協力して、それぞれが食べたい作物を無理なく栽培できるように、私たち運営側からはあれこれ口を出さず、現場に任せています。

11年に施設を開設した当時は、半農半Xという概念は私にはありませんでした。しかし、以前は専業農家が大勢だったこの地域でも、時代の変化とともに兼業農家がほとんどに。公務員や会社勤めをしながら、土日に農業するという生活は当たり前前のこととなってきました。そのため職員も、とくに意識している

わけでもないようですが、半農半介護で日々仕事をしています。農作業が加わると、冬以外はゆつくりと休める時間が少ないのが実情で、農村のスローライフなんてものではなく、むしろビジーライフです。

当初は、日常介護業務に定期的に農作業を組み込む予定でしたが、いざ始めてみると実務的に困難だったため、すばるファーム立ち上げ時には、農業経験のある専門職員を2人雇用もしました。

農作業で生きがいを感じてほしい

私は、介護施設内での利用者に向けたさまざまな取り組みももちろん大切だと

介護のプロ集団としての施設の役割は、利用者のリスク回避だけではなく、一人一人の残存機能を活かしながら、生きがいを維持してもらうことが最も重要ではないでしょうか。

私たちの施設では、介護事業所とB型事業所、農作業所の利用者や職員が有機的に絡まり合い、飼っている犬や猫やヤギといった動物たちも含めて頻りに交流しています。半農半介護の日常生活から地方における共生社会の姿が少しずつ見えており、日本各地でこうした活動がゆるやかに広まってほしいと願っています。



すばるファームでニンニクづくりに励む障害者。固有種の八幡平バイオレットは大玉に育つのが特徴。今年から黒ニンニクの加工も始めた

